

秋田市立日新小学校改築基本・実施設計業務委託に関する
公募型プロポーザルの審査結果報告書

秋田市立日新小学校改築基本・実施設計業務委託
に関する公募型プロポーザル審査委員会
委員長 板垣直行

1. はじめに

秋田市立日新小学校改築基本・実施設計業務委託に関するプロポーザルに対しては、厳しい設計条件にもかかわらず多数の応募を得て、新校舎の空間ならびに設計プロセス、実施体制についてさまざまな創意工夫と熱意のあふれる提案を頂いた。審査員を代表して、応募者に心から敬意とお礼を申し上げたい。

2. 審査経過と結果

一次審査を通過した6者から提出された提案書について、プレゼンテーションおよびヒアリングを実施した。その後、プレゼンテーションにおいて協議対象になる問題点や失格になる禁止事項が無かったかを確認し、各審査員が技術提案書評価要領に基づき厳正な採点を行った。集計の結果、次に示す評価集計表の結果となり、これを踏まえて委員全員で協議を行った。合計評価点についてはC社、D社が飛び抜けて高かったが、これら以外の提案について優れた点を確認し、選定の協議に含めるべきかを検討した。その上で、C社、D社に絞って、それぞれの提案の特徴、優れている点、課題点等について意見交換を行い、どちらを最優秀とするか協議した。長時間にわたり協議を行ったが、いずれかの提案に意見がまとまらず、審査委員の意見が半々に分かれ議論が平行状態となった。その後、決定方法を含めて議論し、最終的には当初の採点結果を尊重すべきという意見が支持され、合計評価点が最も高いC社を最優秀とし、次点をD社と決定した。

3. プロポーザル評価集計表

二次審査	A社	B社	C社	D社	E社	F社	G社
評価点	433.0	413.7	503.6	491.0	辞退	347.5	431.8
結果			最優秀	次点			

【最優秀(C社)】

有限会社村田弘建築設計事務所
代表取締役 村田良太

4. 講評

冒頭に述べた通り、今回のプロポーザルは、制約条件が多く、また秋田県初の木造3階建学校校舎という難しい課題にも関わらず、約2ヶ月という短い期間で大変素晴らしい提案内容を練り上げて頂いた。各応募者の熱意と努力に敬意を表する。

課題に対する提案内容として、まず「日新小学校の伝統と特徴をいかし、次の世代につなぐ学校

を創造する提案について」は、学校目標を様々に解釈頂き、それを具現化した敷地計画、校舎棟構成・ゾーニング、教室配置、建築空間を多様に提案頂いた。ホールや図書館などを特徴的な交流空間として、子供達の学びの場とする提案が多くみられた。また多様な教育活動に柔軟に対応できる空間の工夫に関しては、従来取り入れられてきたオープンスペースによる提案が多かったが、クラスルーム接続型とクラスルーム一体型の両方を取り入れた新たな提案もあった。新屋の歴史を理解するための工夫も、校舎のデザインや仕上げ、敷地動線などにも表して頂いた。これらの具体的な提案については、教育現場の実情などからも議論があったが、今後の実施設計において各提案を踏まえて、適切に検討、改善を図って実現して頂きたい。

「木造で建築する学校整備の考え方について」は、それぞれが木の魅力を活かした提案がなされていて、木造ならではの豊かな学習環境が期待できるものが多かった。一方でそれを実現するための、構造、防耐火等の技術に関しては、具体性、実現性に差がみられた。特にコスト的な制約の中で実現を検討できているかは重要なポイントであり、今後の実施設計においてもその点が問われると考えられる。木材調達に関しては、秋田といえども、大量の木材発注では、複数の業者間での連携が必要であり、それを上手くコントロールする体制づくりが求められる。これに対し、地元の関係業者、団体との連携を図り、調達チームや協議会などを設置する提案が多くみられた。地下水に配慮した杭地業に関しては、かなり特殊な事情ではあるが、これに対しても様々な対処方法を提案頂くことができた。

「環境負荷低減を踏まえた設備機器の採用や、将来の設備（配管等を含む）改修に対して具体的な施設整備方針を提案すること」に対しては、日射、通風によるパッシブ手法を活かした計画や自然エネルギーの活用などの基本的な手法の他、消費エネルギーの見える化や BEMS の採用など、様々に環境に配慮した提案がみられた。また防災対策や非常時での使用にも配慮した提案も頂いた。一方、維持保全計画に関しては、メンテナンス・改修を考えた余裕のある設備や配管のスペースの確保がほとんどの提案で挙げられていたが、実施設計においてどこまでそれを実現できるかということになると思われる。メンテナンスには、木材の利用を考慮したものや、場所柄から塩害に配慮した提案もみられた。

「既存校舎を使用しながら改築を行うことから、事業計画内で実現可能な建替計画を示すと共に、工事中の児童の安全配慮や学校運営、周辺地域への配慮について提案すること」に対しても、様々な配慮を頂いた。建て替えのシミュレーションを丁寧に検討頂いた案も多く、建て替え期間にもグラウンドが一部使えるように配慮されている提案もみられた。現状として接続する道路が狭く、限られているものの、児童の通学路や校内動線と工事車両が交わらないように、工程に応じた対応を示して頂けた。

以上のように、いずれの応募者も、提示された課題に真摯に向き合い、豊富で素晴らしい提案をして頂けたと感じている。一方で、実際の厳しい条件を満たしつつ、これらの提案を実現するための創意工夫がなされているかは、やや差があったと思われる。これらについて、以下に個別の講評を述べる。

《最優秀》

C社(有限会社村田弘建築設計事務所)

建築物のゾーニングが明解で校内の動線距離に配慮されており、中央に配置された職員室からはグラウンドや昇降口などに目配りできる。またその配置を活かした構内街路空間も、児童の登下校動線とスムーズにつながっている。学年ごとにユニット化された教室は、それぞれに多目的スペース設けたオーソドックスな提案であったが、教育現場の視点からは支持が高かった。また、メディアセンター「知の杜」は木造の大黒柱と方杖による樹状のダイナミックな空間で児童や教職員がのびのびと学びふれあう場として魅力ある空間となっている。これらの建物の構成や空間の使い方の考え方が評価された。

一方で、提案する木造大規模建築における構造・耐火技術に対し、必ずしも十分な検討がされているとは言えなかった。また、空調機器の新調やバス回転所の人工地盤設置など、コスト増の要素がある一方で、コスト削減に対する具体性のある工夫があまりみられなかった。実施設計においては、中大規模木造に精通した専門技術者を含めた実施レベルでの検討と、適切なコスト管理が強く求められる。最優秀として採択するにあたり、これらに対する更なる検討を望む意見があったことを、この場を借りて付言しておきたい。

《次点》

D社

校舎の配置計画をシンプルなI型としつつ、校舎棟中央に図書室や特別教室などを集め、両翼に各学年を配置することで、アクティブでパブリックな学びの場から、各クラスのプライベートな学びの場に変化させている。さらに各教室に設ける共有スペース「ネスト」は多様な学びに対応し、段階的に変化する教育空間として魅力を感じる。これにつながる廊下は路地のように屈折しており児童の居場所づくりに配慮した面白い空間となっている。一方で、校舎内動線が屈折していることによって、教師から目の届かない場所が多くなるほか、避難時に児童をスムーズに一斉移動させることに不安が残ることなど、教育現場からプラン構成などの考え方に、強く懸念があった。

構造的には格子耐力壁などを取り入れて、開放的かつ耐震的な木質空間を合理的に提案している。耐火に対する計画は、法令を踏まえた大変優れた考え方がなされており、耐火構造により有効に区画しつつ、屋体棟を通常建築としてコスト削減の工夫が図られている。さらに、拡張地の地盤に合わせて屋体棟のフロアレベルを下げて最低限の造成とするなど、積極的なコスト削減の考え方が高く評価された。

《非選定企業体》

A社

コの字形状の配置計画で普通教室全てが南採光がとれるような計画となっており、それらを繋ぐ「通り土間」のようなメディア棟は学習展示や児童や教師の交流スペースとして期待できる魅力ある空間となっていた。また、防耐火計画や構造架構についても、大規模木造としてのポイントを踏まえた提案であった。一方で提案のグラウンド配置計画では既存校舎の地盤レベルと同等の高さまで拡張地を盛り土する必要がある等、敷地計画の考え方に課題もあることから、選定には至らなかった。

G社

配置計画では明確なゾーニングと中庭をはさみ児童の動きが見える空間が創造でき、面積以上の広い空間が感じられたが、一方でプランや動線の複雑化と、それに伴うコストの増大に対して十分な合理性が認められなかった。木材調達方法については具体的な提案もあり、内外の木材利用についても意気込みが感じられたが、一番重要となる木造としての構造計画が十分に示されなかった。また、大型バスロータリーの配置では狭隘な北側生活道路に向けて配置されている点など、敷地計画の考え方にも課題もあり、高い評価を得るには至らなかった。

B社

配置計画では教室間に大きなワークスペースを設け、さまざまな教育活動に柔軟に対応できる空間として期待できるが、一方で教室棟と管理棟・特別教室棟を完全に区分したゾーニングにはデメリットも感じられた。木材調達や木の魅力を活かした校舎の計画には高い意識を感じられたが、準耐火構造としての合理性などに疑問も残った。

敷地の現状に合わせて体育館の地盤レベルを下げつつ、拡張地の盛り土について、残土と埋め戻しを具体的に検討している点は評価できる。一方で大型バスロータリーの配置など敷地計画の考え方に課題もあり、高い評価を得るには至らなかった。

F社

地域の特徴として水に着目し、それを感じ取ることができる手押しポンプを設置し、学びの教材および避難所開設時に利用するなどの考え方はユニークであった。また環境負荷低減に対し、ZEBの考え方やヒートポンプの活用など高い意識は感じられたが、本計画での具体性に乏しかった。校舎のプラン構成やそれを実現する木造としての構造・耐火の考え方も、合理性に欠けているところがみられた。また建替え計画も独創的な配置ローリング計画であったが、各工程実施期間などの考え方には課題も感じられた。これらより、高い評価を得るには至らなかった。

以上